

[論文]

日本の保育現場に生かすレッジョ・エミリアの幼児教育アプローチ  
—プロジェクトの実践から— その2

\* 鹿戸 一範  
\*\* 豊泉 尚美  
\*\*\* 伊藤 明芳

Reggio Emilia's Early Childhood Education Approach for Childcare in Japan  
— Focusing on the practice of the Project —

Kazunori Shikato  
Naomi Toyozumi  
Akiyoshi Ito

キーワード： レッジョ・エミリア、プロジェクト、子どもの主体性、表現活動

Key Words: Reggio Emilia, Project, Children's autonomy, Self-expression activities

要約： レッジョ・エミリアの幼児教育の特徴である「プロジェクト」は、子どもの興味・関心を基に、子どもの主体性を尊重しつつ、保育者と共に学びを深めていく活動である。本研究では、「子どもたち、親、保育士」を3つの主体と捉え、それぞれがどのようにプロジェクトへ関わり、プロジェクトとの関わりによって、どのような変化が生じたか、またプロジェクトの実践に当たり空間環境もその効果に影響を与えるのではないかと仮説の下、その現状について調査し考察することを目的とした。調査の結果、プロジェクトの実践は「子どもたち、親、保育士」それぞれに好影響を及ぼすことを確認できた。また、レッジョ・エミリアのような恵まれた物的環境はなくとも、保育士らは空間のデザ

インの工夫やドキュメンテーションの積極的な活用により、ハード面での不十分さをカバーし効果を挙げていることを確認した。

## I はじめに —研究の背景と目的—

イタリアの小都市レッジョ・エミリアの幼児教育は、1980年代から今日まで注目を集め、そこで行われる教育的アプローチは、様々な国や地域で広がりを見せてきた。レッジョ・エミリアの幼児教育にとりわけ特徴的な、協同的な学びを通して子どもの主体性を促す「プロジェクト」（後述）が各地の保育施設や幼児教育の現場で行われている。

日本の幼児教育においてプロジェクトを導入している場合は、現状多くはないが、中央教育審議会幼稚園教育部会による「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」（平成17年）では、以下のように明記されている<sup>i</sup>。

- ・幼稚園等施設において、小学校入学前の主に5歳児を対象として、幼児どうしが、教師の援助の下で、共通の目的・挑戦的な課題など、一つの目標を作り出し、協力工夫して解決していく活動を「協同的な学び」として位置付け、その取組を推奨する必要がある。

- ・遊びの中での興味や関心に沿った活動から、興味や関心を生かした学びへ、さらに教科等を中心とした学習へのつながりを踏まえ、幼児期から児童期への教育の流れを意識して、幼児教育における教育内容や方法を充実する必要がある。

ここに「協同的な学び」「興味や関心を生かした学び」といった、プロジェクトとの関連性が非常に高いキーワードが示されていることから、レッジョ・エミリアの思想と保育実践が、日本の幼児教育においても大きな影響を及ぼしていると推測することができる。

筆者らは、レッジョ・エミリアの幼児教育の思想中核をなすプロジェクトを関東某県にあるM市内の3か所の保育所で担任保育士らと共に実践してきた。

筆者らの以前の研究において、プロジェクトの実践により、協同的な学びを通して子どもの主体性を促すことを確認した。同時に、従来の保育や子ども観から捉え直し、保育に向かうべきだとする保育士の意識の変化を明らかにした<sup>ii</sup>。

本研究では、「子どもたち、親、保育士」を3つの主体と捉え、それぞれがどのようにプロジェクトへ関わり、その継続によって、どのような変化が生じたか、またプロジェクトの実践に当たり空間環境もその効果に影響を与えるのではないかと仮説の下、プロジェクトがどのような空間環境において実践されたかその現状について調査し考察することを目的とする。なお本研究における、プロジェクト実践テーマ及び具体的内容については筆者らの以前の研究を参照されたい<sup>iii</sup>。

## II レッジョ・エミリアのプロジェクトとその成否に影響を与える要素について

ここで、改めてレッジョ・エミリアの「プロジェクト」について概説する。

プロジェクトにおいては、子ども同士、子どもと保育者の対話によって協同的探究を行い、協同的に発展的に変化するテーマを探求していくのが最も重要なことと考えられている。そのため、月や週の指導計画として予め保育者が定めた課題ではなく、子どもたちがその関心や興味に基づいて主体的にテーマを定め、体験的に活動が進められる。具体的に

は、4～6人の子どもたちによる小グループを構成し、その小グループでの協同作業を通じて、子どもたちが設定したテーマについて研究を深める取組みである。保育者はその間、子どもたちが作業するための環境を整え、作業の方向性を推測して準備を行い、子どもたちの活動状況を「ドキュメンテーション」として記録化し、他の保育士・親・子どもたち自身と共有することが求められる。

「ドキュメンテーション」とは、子どもたちの活動している様子を写真に撮り、活動中の会話を文字に起こし、制作した作品を展示し、それらを保育者の観察と解釈によりまとめた実践記録である。文字だけではなく、特に写真というツールを活用することで、より「学びを可視化」することができる。ドキュメンテーションは、教室や廊下の壁に掲示され、他の保育士・親・子どもたち自身にも展示公開され、プロジェクトでの学びの共有を可能にし、多くのコミュニケーションを生み出す手段となっている。ドキュメンテーションによって、子どもが自分の過去の経験や活動をいつでも振り返ることができ、自分の活動に意味や価値を見いだすという省察的学びが可能となる。また親の子どもの活動に対する興味関心を高め、理解を深める役割も果たす。保育者の省察やリフレクションといった「振り返り」を生み、保育の質の向上にもつながっている。

なお、プロジェクトを展開するうえでは、活動の場となる空間構成がその効果に大きな影響を与えていることも指摘しておく。レッジョ・エミリアでは、子どもたちと保育者が自由に集い、行き来するピアツァ (piazza) と呼ばれるオープンな広場、アトリエリスタ (atelierista) と呼ばれるアートを専門とした教師が常駐するアトリエが各幼児学校にあり、ピアツァから、各教室やアトリエが配置され連続する空間となっている。オープンスペースで子どもたちの創造的活動を促す効果が生じる。

### III 研究方法

#### 1. 調査対象と調査時期

本研究の調査対象者は、M市保育士の6名。2021年8月から9月に実施。

#### 2. 手続き

各保育士が所属する保育所内で、当該保育士と筆者(内2名のどちらか)の的一对一で対面による面接調査を行った。質問内容はあらかじめ確定されたものであるが、状況に応じて臨機応変に質問を深めたり、追加したりできるように半構造化面接法 (semi-structured interview) を用いて実施した。事前に許可を取り、ICレコーダーを使用し面接内容を録音し、録音した面接内容は逐語録から研究目的に沿って要約したものを分析対象とした。なお、倫理的配慮については、筆者らが所属する秋草学園短期大学研究倫理審査委員会の承認を得ている(受付番号 2021-5)。

## 3. 調査対象者の内訳

[表 1] 調査対象者のプロフィール

対象者	保育歴	備 考
A 保育士	10 年	1 歳児担任 プロジェクト活動時= 5 歳児クラス担任
B 保育士	20 年	4 歳児担任 プロジェクト活動時= 5 歳児クラス担任
C 保育士	26 年	保育リーダー プロジェクト活動時= 5 歳児クラス担任
D 保育士	29 年	保育リーダー プロジェクト活動時= 5 歳児クラス担任
E 保育士	31 年	保育リーダー プロジェクト活動時=保育リーダー
F 保育士	31 年	所長 プロジェクト活動時=保育リーダー

\*A, B, C, D 保育士は、5 歳児クラス担任として、子どもと関わり、実際にプロジェクトを行い、E, F 保育士は、保育リーダーとして、担任保育士と協同してプロジェクトに参加した。なお、保育歴、備考欄の役職・担当クラスは調査時のものである。

## 4. 調査内容

レッジョ・エミリアでのプロジェクトが、主体的で協同的な学びを前提としていることを踏まえ、プロジェクトの過程での子ども同士、保育士と子ども、保育者と親の関わりについて質問した [質問 1-(1) (2) (3)]。また、プロジェクトを行う際、子ども、保育士、親という人的環境が中核をなすと同時に、保育を行う空間環境も重要であるところから、[質問 2] を設定した。

[表 2] 調査対象者への調査内容

<p>1. 保育の 3 つの主体として、「子どもたち・親たち・保育者たち」が考えられます。</p> <p>(1) 「プロジェクト活動」について、親たちとの関わりはどうでしたか。またどうあるべきだと考えますか。</p> <p>(2) 「プロジェクト活動」においては、小グループ (2～5 人くらい) における子どもたち同士の関係とその相互作用が重要となります。</p> <p>①小グループ内での子どもたちの関係はどうでしたか。</p> <p>②小グループ同士の関係はどうでしたか。</p> <p>(3) 「プロジェクト活動」において、保育者は、子どもたちをしっかりとみつめ、子どもたちの話に耳を傾けます。そして得た理解を用いて、子どもたちと共に、協力していく学びの過程の役割を担うと考えられます。プロジェクト活動で、そのような「学びの過程」を体験することができましたか。また、子どもと共にどんなことを学びましたか。</p> <p>2. 保育所の空間環境についてお尋ねします。</p>
--

保育所の空間環境が子どもに与える影響は大きいと考えられます。

保育所では、空間の美しさを創りだすことや、子ども自身の作品を展示すること、音の環境や居心地のよい空間にすることなどに、どのように配慮をされていますか。また、保育所の空間環境が今後どうあるべきだと考えますか？

#### IV 結果と考察

ここでは、面接対象者に質問項目ごとに、それぞれの回答を逐語訳から要約し表にまとめ、研究主旨に沿って考察のコメントを記した。

質問項目 1：保育の 3 つの主体として、「子どもたち・親たち・保育者たち」が考えられます。それぞれについてお尋ねします。

(1)「プロジェクト活動」について、親たちとの関わりはどうでしたか。またどうあるべきだと考えますか。

[表 3] 対象者と親の関わり

A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お帰りの時、保護者が部屋に入ってドキュメンテーションを見て、「こんなことしたの？」と子どもに尋ねたり、子どもの方から保護者に語ったりして、プロジェクトの内容はある程度伝わっていたと思う。また、日々の保育便りに内容を掲載したり、発表会をしっかりと見てもらったりして保護者との関わりを持った。</li> <li>・プロジェクト時の反省点として、もっと周りを巻き込んで写真を撮っておけばよかったと思う。</li> <li>・親が子どもに関心を向けてもらえたら、子どもの体験や理解も深まっていいと思った。</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親たちにもプロジェクト活動を知らせたいと思って、子どもたちの活動が進むたびに内容や様子を伝えるドキュメンテーションを廊下にどんどん貼っていった。4 月から懇談会の度に保護者にプロジェクトについて詳しく伝えるよう心がけた。その結果、ノートや口頭で親からの反響が多かった。</li> <li>・親たちは、子どもの姿とドキュメンテーションを照らし合わせて、プロジェクト活動に共感を示してくれていた。プロジェクトのテーマを子どもと家で調べたりすることもあった。</li> <li>・プロジェクトの集大成のひとつ、劇発表については、保護者からよい感想ばかりで、担任としてとても嬉しかった。(こんな劇を見たのは初めてで、びっくりしました！子どもたちが一生懸命取り組む様子が素晴らしかった、など)</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラス便りやドキュメンテーションで伝える形をとった。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者に直接伝えるケース（例：色々苦手なことが多いY君が、プロジェクトを通して日に日に姿が変わっていった。その成長を感じさせたエピソードなど。）</li> <li>・文章だけのお便りというよりは、写真をふんだんに取り入れコメントをつけるドキュメンテーションの方が伝わりやすいと思う。</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドキュメンテーションを廊下に貼って、保護者が来た時に見てもらおうようにしている。そこではプロジェクトの過程を示しているのので、保護者が見て「あの子があのとき言っていたことが理解できました！」といった話が出た。新型コロナウイルス感染が始まってからは、保護者との交流がしづらいため、ドキュメンテーションはますます活用されている。</li> <li>・ドキュメンテーションによって、「今こうしているんだ」と保護者にはっきり理解され、とても共感をもってもらえるのだとわかった。</li> </ul>
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育しながら、「今、プロジェクト活動の過程を踏んでるよ」と親に伝えたい気持ちがあるので、日々ホワイトボードやクラス便りに記入したり、写真や文を添えてドキュメンテーションを提示したりした。「子どもたちが家で生き生きと話してくれました」と親からのリターンも多く、保護者に伝えることは大切だとすごく感じた。</li> <li>・保護者の一人が書いて渡してくれた「春祭り（2月に実施）」の感想。「とても感動した。一部の決まった子だけが発言しているのではなく、一人一人が大きな声でみなに聞こえるように堂々と演じていて頼もしかった。もう一つの感動は、劇の内容が本ではなく、自分たちで考えたものであり、先生たちもそれに合わせて作曲してくださったということ。見ている方もとても楽しかった。色々できる子どもたちも素晴らしいが、担任の先生方が子どもたちの自主性を引き出し、想像力を大切に下さったことがとてもよく伝わり、本当に感謝している。」</li> <li>・子どもとの話し合いの中で、わからないことは「おうちの人に聞いてみてね」と声をかけるようにしていた。その結果保護者から「子どもにこんなことを聞かれました」とか「こんな工夫をすると面白いですよ」などと反応が返ってきた。</li> <li>・プロジェクトは、子どもにとって保護者との会話につながり、共感を得られるよい機会だと思う。保育所での取り組みが子どもから保護者へとつながることで、家庭での会話が増えてよい環境につながる。保護者が保育所の日々に興味関心を持ち、共に子どもの今を見つめる機会になることはとても大切だと感じた。</li> </ul>
F	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動の過程をドキュメンテーションや園のお便りで保護者に伝えてきた。</li> <li>・プロジェクトの最初の発表の機会（春まつり）後、子育てに悩んでいた保護者から「子どもって親が手を引っ張らないで、背中を押してあげるだけでいいんだ」</li> </ul>

「子どもを信じようと思いました」との言葉をもらった。こちらの意図が伝わった気がした。

・日々プロジェクトについて子どもが家でも話し、親が子どもの声に耳を傾け、子どもが調べたり作ったりする姿を見守る姿があった。

保育士らの実感として、プロジェクトにより親とのコミュニケーションが深まり、プロジェクトの過程で、様々な意見や感想が寄せられたことが確認された。特に、ドキュメンテーションを通して、三者間のコミュニケーションの増加傾向が読み取れる。質的な面についても、写真による情報量が増えるほど伝達力が向上する旨の回答も見られた。ドキュメンテーションの作成・展示の頻度や量、またその内容や質を高めていくことが有用であることが本質問項目から改めて明らかとなった。

(2)「プロジェクト活動」においては、小グループ（2～5人くらい）における子どもたち同士の関係とその相互作用が重要となります。

①小グループ内での子どもたちの関係はどうでしたか。

[表4] 小グループ内における子どもたちの関係

A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小グループだと、自分の意見を言えない子にとって、話しやすく意見を言いやすいように見える。意見を出し合えない同士のグループを作ったこともあるが、子ども同士よく話し合えるので、小グループの良さを感じた。</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小グループで、それぞれ自主的に活動に取り組むことで、描画や制作がとても苦手だった数名の子も、自発的に自分がやりたいように描いたり作ったりする姿が見られた。主体的になるとこんなに姿が変わるのか、と感動した。</li> <li>・小グループになると、意見を言える子が出てくる。気持ちが乗りきれていない子がいると、他の子が声をかけたり、自主的にまとめ役になったりする子も出てきた。</li> <li>・役割は代わる時もあれば、同じ子が何度もまとめ役になる場合もあったが、いつもだいたい「みんなでまとめなくちゃ」という流れが理解されていた。</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラス全体で話し合おうとすると、自己主張の強い子たちが自分たちのことを優先しがちで、そこに周りが倣っていたが、小グループでは日々活動を重ねていくうちに、発信力の弱かった子たちも自分の意見を言えるようになり、自己主張の強い子たちもだんだんと折れることを覚え、相手の意見を聞く姿も出てきて、関係性に変化が見られた。</li> <li>・相手が妥協してくれたり、相手の意見を聞いて受け入れてみたりと、お互いを認め合う新しい関係性が生まれた。</li> </ul>



D	<p>・小グループに、配慮が必要な子がそれぞれ1人ずつ入っていて、その子には活動の意味がわからず、全体をかき乱してしまう。こうした難しさはあるものの一年かけてみて、子ども同士一緒にやっっていく中で、「あ、そうか。こういう風に言えば伝わるんだ」とか「～ちゃん一緒にやろうよ」とか言い始め、配慮が必要な子に対する理解ができていったと感じた。</p>
E	<p>・小グループで話し合いをすることで、ノーマライゼーションができていて、一人の意見が出しやすくなり、譲り合いもスムーズになってまとめられると感じる。最初は保育士がメンバーを調整して、控えめな子も意見を出しやすいようにしたが、繰り返しの中で、最終的には誰とでも話し合いができるようになっていった。人間関係はとても良好に変化したと思う。</p> <p>・以前はポツンと一人になりそうな子もいたのに、小グループだとそうならないような子ども同士の関係ができていた。</p>
F	<p>・全体での話し合いだと、最初のうちは各々が言いたいことだけを言っている姿があった。発信が弱い子と強い子の差があった。プロジェクトにおいて小グループで経験を重ねることで「こんなふうにしたい」とグループごとにイメージが膨らみ、明確となり、アイディや工夫が豊かになっていった。個々の制作スキルも向上した。ぶつかり合ったり、譲ったりしながら、人の話を聞いたり、自分の意見を言ったりと積極的に対話が行われ、相手を尊重するような空気が生まれた。自然に役割分担が生まれ、それまで発信が弱かった子に積極性も見られるようになった。</p>

大人数ではなく少人数だからこそ生じる効果についての言及が多くを占めた。特に、発信力が弱かった子どもが主張できるようになること、相互に尊重しあい、相手の意見に耳を傾ける姿勢が身についたとする回答が多い。またこれに関連し、ノーマライゼーションの観点から好影響があったとする回答も見られた。

②小グループ同士の関係はどうでしたか。

[表5] 小グループ同士の関係

A	<p>・グループ同士の交流は「劇」に向けて、というのがメインだったが、グループ同士でドキドキして台詞が言えない子に対して、自然にフォローできる姿が見られた。自主的に練習する姿を見ることができ、成長を感じた。</p>
B	<p>・終わっていないグループがあると、他のグループの子たちがそれを見つけて自主的に手伝いに来ていた。</p> <p>・グループ同士で進行状況を見せ合った時に「すごいね！」と共感を示したり、励ましたり、「こんなやりかたもあるんじゃないの？」と意見を言ったりしていた。</p>

	<p>そうした意見交換のおかげで、それぞれのグループの表現の広がりがあったのではないか、と思う。</p> <p>・当時1クラス25人で、2人の保育者（1人は加配）でプロジェクトを行ったが、ふだんの保育と違って小グループ（4，5人で5グループ）の活動だと、あっちもこっちも見なくてはならず、担任1人ではかなり大変だった。現状特別な配慮が必要な子も増えているので、理想的には3グループ、15人くらいだと、もっと声を拾ってあげて、一人ひとりを丁寧に見てあげられていいな、と実感する。</p>
C	<p>・かつてはクラスがみんなバラバラで、気ままで罵声を浴びせるような男児もいたが、小グループによるプロジェクトの過程でそのようなことがなくなった。本当によくここまで落ち着き、成長できたと思う。</p>
D	<p>・保育所には配慮の必要な色々な子がいるが、対等な立場での自分の立ち位置というのを子どもたちはそれぞれの小グループで学んでいくのだな、と強く思う。プロジェクトだと発表会を目的とするわけではないので、ゴールや「このくらいまでうまくやらなきゃ」ということでなく、お互いを認め合っていく過程と捉えることができる。子どもたちは本当に純粋にノーマライゼーションができています。</p>
E	<p>・「劇こんなふうにするよ」と互いに発表する時間があり、そこで話し合い後の報告をする際には、自分が所属するグループについて自慢げで、他のグループの話に対して興味を持って聞けるようになってきた。</p> <p>・「よくしよう！」ということが共通点なので、互いに良い刺激になっていったようだ。例えば誰かが欠席しても、自然に自分たちで調整して補完するので問題にならない、という状況だった。</p>
F	<p>・後半になると、各小グループで起こっていたことがクラス全体に広がっていった。役割分担が生まれ、それぞれが自分の役割に責任と誇りを持っているような感じだった。互いが尊重される（自分は自分でいい、君は君でいいというような感じが生まれた）。</p> <p>・視野が広がり、周りを見て配慮したりサポートしたりし合う姿があった。回を重ねていくと、大人が口を出さずに子どもの力を信じていることができるようになり、子どもが困った時には一緒に考えることを繰り返したことで、一人ひとりの主体性から、グループ同士の主体性へとつながっていったような気がする。</p>

他グループをフォローする姿や、共感や励まし、意見交換しあう姿が見られ対話が生まれた。小グループのそれぞれの様子を見守ることは、担任が一人体制では難しい点も指摘された。概ね(2)①の回答で得られた小グループ内で生じた好反応と同様の反応が、小グループ同士の関係においても生じていることが確認できた。

(3)「プロジェクト活動」において、保育者は、子どもたちをしっかりとみつめ、子どもたちの話に耳を傾けます。そして得た理解を用いて、子どもたちと共に、協力していく学びの過程の役割を担うと考えられます。プロジェクト活動で、そのような「学びの過程」を体験することができましたか。また、子どもと共にどんなことを学びましたか。

[表 6] 調査対象者の学びについて

A	<p>・プロジェクト活動の中で、ある子が板でバイオリンを制作したが、穴を開けたとき音が出なかった。保育者としてもどうしていいかわからず、共に音を出すためにいろいろ試行錯誤し、子どもと共に学ぶ経験をした。そうして理解したことは忘れないと思う。</p>
B	<p>・プロジェクトについての説明の際に講師が言っていた「子どもたちの声をよく聞いて、どうしたら子どもたちがやりたいことを実現できるか考える」という言葉がすごく心に残っている。そのことを実践してみたことが学びとなった。「そうだね」と子どもに共感しておしまいではなくて、どうしたらその子の思いを実現できるか?と本当に考えるようになった。そしてこのことが大きな学びとなった。</p> <p>・子どもたちの方が積極的に活動するようになっていた。その姿を見たことが学びとなった。(エピソード:いつもはおとなしい女児から「先生は黙ってて。はさみだけ貸してくれればいいの。みんなでできるから・・・」と言われた。)</p>
C	<p>・音楽は楽しい、というところから始まり、自分たちの力でグループ分け、楽器決め、リズムを考え、みんなで心をつなげて演奏するという経験を。自分のパートだけではなく、周りの音も聴き、みんなで心をつなげて演奏するところまで体験ができた。みんなで楽しみながら、次はどうしようか、どうしたらもっと楽しくなるか、どうしたらもっと良くなるのか、期待を持ちながら、子どもたちの意見を出しあう姿を見ることができた。</p> <p>・子どもたちに任せることで、客観的に見る機会が増え、子どもたちのそれぞれ新たな面を発見することができた。みんなで楽しみながら、協力し合って、一つのものを創り上げていく素晴らしい経験ができた。</p>
D	<p>・「主体性」という言葉の意味が曖昧で、研修などで聞きかじった程度。子どもの主体性を大切に保育、と言われても漠然としていて、保育指針についても理解はできても具体的な所をもっと知りたい。</p> <p>・子どもだけに任せておくのではなく、保育士が子どもの思考を広めたり、深めたりするサポートの役割があり、子どものディスカッションにも共に入っていく必要がある。子どもの考えを引き出すセンスも必要だと思う。</p> <p>・プロジェクトとその学びの過程は深く、もっと勉強しなければと考えている</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育士は、子どもだけに任せきるのではなくて、子どもの思考を広めたり、深めたりするサポートの役割、彼らがディスカッションにも共に入っていくことが必要なのではと考える。</li> <li>・子どもたちから考え方を引き出すセンスが大切だろう。何が問題点なのか、自分が保育士としてどうしたらいいのか、その案配が難しい。子どもの主体性を大切にする保育といっても漠然としていて、保育指針についても理解はできても、具体的に難しいところをもっと知りたい。</li> <li>・今はとにかくプロジェクト活動がどう実践されているのか、実際に他の園の事例も見てみたい。</li> </ul>
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「子どもの主体性を大切に」と頭ではわかっているが、実際は担任が主導してしまうことが今も保育の場で非常に多く見受けられるが、プロジェクト活動を経験して、保育士って楽しい、子どもってすごい、と感ずることができた。</li> <li>・子どもと共に学びの過程を私なりに体験できたと感じている。子どもと一緒に知らなかったことを知ったり、分からなかったことが分かったり、無からイメージを一緒に作り上げていく過程で、自らやりたいと感ずて行動することで、一つ一つの取り組み、発見、表現すべてのことが尊く、そこからあふれ出すパワーを感じた。</li> <li>・日々の経験全てが子どもの生きる力になるんだな、と感ずられた。それが自分にとって学びだったと思う。</li> </ul>
F	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの興味を知り、その興味が広がるようにさりげなく環境を用意すると、子どもが更に興味を持って、知ること・できることが楽しくなる。するともっと知りたい・もっとやりたい、と繰り返すようになり、スキルアップして、自分に自信が持てるようになる。周りにも目が行き、自分とは違う意見があることを知る。自分の意見を言うことができ、得意なことを率先してやろうとする。また役割分担が自然に生まれる。そして互いを尊重し合いながら、自分の力を精一杯出し合うことで達成感・自己肯定感・有能感を感じる、という学びの過程を体験した。</li> <li>・保育士として、子どもの力はすごい！と実感した。大人が子どもの学びの芽を摘んでいる場面が多いな～と反省し、子どもをもっとよくみてみよう、信じて見守ろう、より深く理解しようと思った。</li> </ul>

プロジェクトにより子どもたちが学びを深めるためには、保育士自身が子どもを理解し、その成長を実感することが前提となるが、本調査において保育士自らが新たな知識や経験を得、保育の質を深め成長につながっていることを実感しており、子どもたちと共に「学びの過程」を体験していることが確認できた。プロジェクトの過程で、子どもに共感するだけで終わらず、一人一人の興味や思いをどのようにしたら表現したり、実現したりできるかを考えるようになった。また、子ども達の力を信じて任せることで、前より子どもを客観的に見る機会が増えたため、それぞれの子どもの新しい面を発見することができ

たという。子どもから得た理解や学びを基に、さらに深く望ましい理解や学びが得られるよう、子ども自身や親、環境への働きかけが必要であるとの示唆も複数得られた。

質問項目 2：保育所の空間環境についてお尋ねします。

保育所の空間環境が子どもに与える影響は大きいと考えられます。

保育所では、空間の美しさを創り出すことや、子ども自身の作品を展示すること、音の環境や居心地のよい空間にすることなどに、どのように配慮をされていますか。また、保育所の空間環境が今後どうあるべきだと考えますか？

[表 7] 保育所の空間環境

A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・美しい空間はもちろん必要だと思うが、予算の範囲内でおこなうとなると現実的には難しい。限られた環境の中で、0歳では素材の優しい感じを大切に、例えば光がまぶしすぎないように、ちょうど保育所にあった薄手のオーガンディーの布を活用し隅っこ空間を作るなど、皆で工夫している。もっと予算があれば、今の保育に合わせて変えていけると思う。</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レッジョ・エミリアでは、保育の空間は美しくあるべきだと考えられていると聞いているし、確かに空間の美しさは大切だと思うが、それをここで実現できてるかということ、制限がありすぎてとても難しい。とにかく一番大きな課題は部屋のスペース。必要なもの以外は置かない、すっきりした状態にするということを心がけている。できるかぎり整理して壁面もきれいにシンプルにしている。</li> <li>・プロジェクト活動を実践してみたが、理想を言えば、子どもたちが好きなときに制作できるアトリエのような部屋が一室あるといい。そこに行けば、いつでも素材や道具が揃っていたら、子どもたちの意欲が全然違うと思う。</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いつでも自由に手にできる楽器や造形のコーナー、子どもたちが自由に描いてきた絵やお手紙などを飾ってあげるコーナーを設けるなど、限られた環境の中でできる範囲での工夫をしている。</li> <li>・子どもたちの作ったものを飾ってあげると、子どもは認められた気持ちから自己肯定感が高まる。またそれを目にした子は、字や絵に興味を持つ、など何かしらの刺激を受ける。見てもらえる場を作ってあげることは大切に考えているので、今後も継続していきたい。</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>・空間環境が大切なのはよく理解しており、周りにも伝えていきたいが、なかなか環境まで手が回らないのが現状。</li> <li>・子どもの目の高さが乱雑にならないよう、目隠しに布を使ったり、観葉植物を置いたりするようにしている。(引っ張ったら危ない、植物に触ってしまう、という</li> </ul>

	<p>批判もあったが、ずっとやり続けることによって子どもが布や植物に触らなくなる)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの動線に配慮している。去年2歳児クラスに発達巡回指導が入ったときに、コーナーの作り方に動線の配慮が必要と指導を受けた。翌日からみな座って作業に集中できるようになった。動線はとても大事だと思った。</li> <li>・保育所のハード面はしかたないが、インテリアは変えていける。</li> </ul>
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>・空間的には季節のものや、子どもが「これ面白かったんだよ」といって持ってきたものをうまく飾るように心がけている。子どもが保育所にいる時間、ここで生きる時間、環境（人的・物的）は心の栄養だと思っている。</li> <li>・保育士の言葉、選ぶ音楽、玩具、絵本、色・・・全てのものから環境が創り上げられると思うと、子どもに与えるものの美的センスは重要だと考える。</li> <li>・生活空間が豊かであればあるほど、心の豊かさにつながり、穏やかな心を育み、遊びが充実していくと思う。自分が見たもの聞いたもの、感じたことなど全部が自分を作っているんだな、と思うと、保育室の環境は大事だ。</li> <li>・保育士は個を大切にし、個を見つめることで子どもの興味関心を知り、その先の展開へつなげる環境を作っていく・・・その繰り返しが幼児期の生活であるべきだと感じる。その中で作られた作品を展示することは、個が大切にされる瞬間なので、見る人が素敵だ！と感じられるようにしたい。保育所はそうあるべきだと思う。</li> </ul>
F	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の状況では、子どもへの配慮や思いがなさすぎると感じている。保育士同士の意識、興味の共有が追いついていない。一人一人を大事にすることを丁寧に考え、環境を整えていきたい（例：造形の素材選びなども・・・）</li> </ul>

保育士らは、保育室の空間環境について、レτζョ・エミリアのように美しい保育空間が大切であり、生活空間の豊かさが心の豊かさにつながるの考えを抱いているものの、一方で、予算やスペースなどに制限があり、理想とする環境に近づけていく事の難しさを感じている。現状での具体的な取り組みとしては、自分たちのできる範囲で、造形コーナーや楽器コーナーなどのアトリエ的な空間を設けたり、子どもたちの制作物をできるだけ美しく見せる事ができるように飾ったりするなどの工夫が挙げられている。保育者それぞれが、子どもたちの興味関心に沿って、先の展開へつなげることのできる環境を整えようと努めている姿が窺える。

## V おわりに

本研究では、保育所の1つのクラスにおいて、「子どもたち、親、保育士」がどのようにプロジェクトへ関わり、プロジェクトとの関わりによって、どのような変化が生じたか、またプロジェクトの実践に当たり、プロジェクトがどのような空間環境において実践

されたかその現状について調査し考察し、課題を探ることを目的としてきた。調査結果を踏まえ、プロジェクトの主要なメンバーである子ども、親、保育士に対するプロジェクトの与える影響についてそれぞれ再確認する。

まず、子どもたちは小グループでの活動を行うことで、子ども間の対話が促され主体的に活動を進めるのに有効であることを確認できた。小グループ同士の意見や考えの交流により、各グループの主体的活動が共感をもって理解され、協同的な学びが更に深まる様子が見られた。

次に、親については、子どもや保育士とのつながりの観点から見た場合、ドキュメンテーションが果たす役割が非常に大きなものであることが明らかになった。

そして、保育士らは、プロジェクトを通して、子どもたちが以前より意見を出し合ったり、協力し合ったりして主体的に活動に向かう姿を見て、子どもの「主体性」について更に深く考察する必要があると感じている。また、ドキュメンテーションを作成し、子どもたちとの対話を重ねながらプロジェクトを進めていく中で、保育士自身も子どもの潜在する能力への信頼、主体性を大切すべきこと、興味・関心に沿った柔軟な環境構成<emergent curriculum>などが重要であることを強く実感したことを確認した。

最後に、インタビューを行った保育所では、物的な空間環境については、レッジョ・エミリアのピアッツアやアトリエのような恵まれた環境にはなく、そうしたハード面での充実を現在望むことはできない。しかし、子どもが主体性を発揮し、保育士や親と協同して作業し、より効果的なドキュメンテーションの掲示などができるようにする等、各保育士が空間のデザインを工夫している様子が確認できた。

これらの調査分析を踏まえ、今回のインタビューで得た知見を基に、今後もレッジョ・エミリアの幼児教育に示唆を受けつつ、今後は日本の保育の在り方についてより踏み込んだ研究を継続していきたい。

#### 謝辞

保育所で子どもたちと共にプロジェクトを实践され、本研究のためにお忙しい中、快くインタビューに応じて下さった、熱意ある保育士の方々に心より感謝申し上げます。

#### 【参考・引用文献】

- 厚生労働省(2018).『保育所保育指針解説』 フレーベル館  
 佐藤学(監修)ワタリウム美術館編(2011).『驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育』 ACCESS

L. カッツ・S. チャード(著)小田豊監修・奥野正義(訳) (2004). 子どもの心といきいきとかわりあうプロジェクト・アプローチ 第2版 光生館

C. エドワーズ・L. ガンディーニ・G. フォアマン(著)佐藤学・森真理・塚田美紀(訳) (2001).

子どもたちの100の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育 世織書房

J. ヘンドリック(編) (2000). レッジョ・エミリア 保育実践入門 北大路書房

---

i 文部科学省中央教育審議会 (2005) 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について (答申)

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102.htm)

(閲覧日: 2022. 10. 22)

ii 鹿戸一範・豊泉尚美・伊藤明芳 (2021) 「日本の保育現場に生かすレッジョ・エミリアの幼児教育アプローチ—プロジェクトの実践から—」秋草学園短期大学研究紀要 38 号

iii 鹿戸一範・豊泉尚美・伊藤明芳 (2021) 「日本の保育現場に生かすレッジョ・エミリアの幼児教育アプローチ—プロジェクトの実践から—」秋草学園短期大学研究紀要 38 号 pp.45-47

\*鹿戸 一範 秋草学園短期大学 幼児教育学科 准教授

\*\*豊泉 尚美 秋草学園短期大学 名誉教授

\*\*\*伊藤 明芳 秋草学園短期大学 文化表現学科 教授